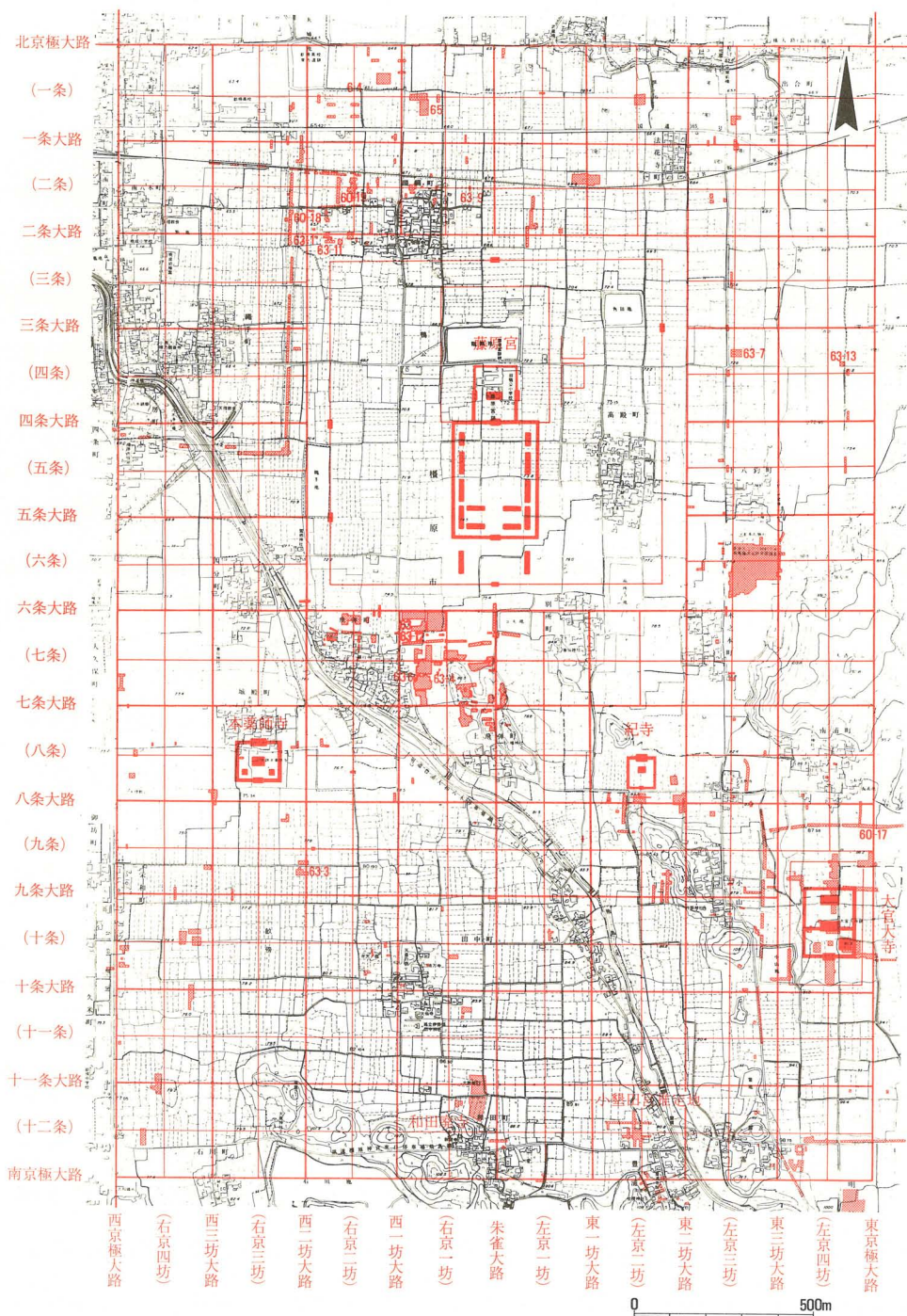


## II 藤原京の調査



藤原京内調査位置図

## 1 左京四条三坊の調査（第63－7次）

（1990年7月～9月）

この調査は、駐車場建設にともなう事前調査として、橿原市下八釣町で行ったものである。調査地は藤原京左京四条三坊東北・西北坪にまたがっている。三坊坊間路とその東西の宅地利用状況を明らかにすることを主たる目的に、南北20m・東西25mの調査区を設定した。基本層序は耕土・床土・暗褐色土・灰褐色粘質土の順で、暗褐色土・灰褐色粘質土の各上面で、中世の東西および南北方向の小溝多数、またその下の黄褐色粘質土面で藤原宮期の遺構と弥生時代後期末頃と思われる遺構を検出した。

**藤原宮期以前の遺構** SD6969は長辺が約13m、短辺が約11.5m、深さ約30cm、断面がU字形を呈する溝で、茶褐灰色粘質土が堆積していた。円形周溝墓の周溝である可能性が強い。埋土中には弥生後期（第V様式末頃）の土器が少なからず含まれており、東部で1ヶ所、特に量の多い範囲があった。同時期の土器は東南方向にある土坑SK6942・SK6943にもまとまって堆積していた。SD6960は、SD6969と埋土がよく似た溝状遺構である。今回の調査ではその東の一部が見つかったにすぎない。溝内に遺物はなかった。その東南には土坑SX6970・SX6971があり、SX6971の埋土からは弥生時代の壺形土器が出土した。

**藤原宮期の遺構** 藤原宮期の遺構は重複関係によってA期、B期に分けることができる。

**A期** 東三坊坊間路およびその東西両側溝と、掘立柱塀SA6956・SA6957・SA6958・SA6959がある。坊間路の側溝は何度か掘り直されており、西側溝が3本（SD6951・SD6952・SD6953）、東側溝が2本（SD6954・SD6955）ある。西側溝は切り合い関係からSD6953→SD6952→SD6951の順である。いずれも埋土中に藤原宮期の土器片が含まれている。層位や埋土の遺物からこれらの側溝と塀の並存関係を確認することはできなかつた。西端のSD6952は、SA6958の南6m付近から東に蛇行し、SA6958の東北で途切れている。SD6951・SD6953は、SA6958の東南で途切れるが、北側へとまた続いている。東側溝SD6954もSA6959の西南で

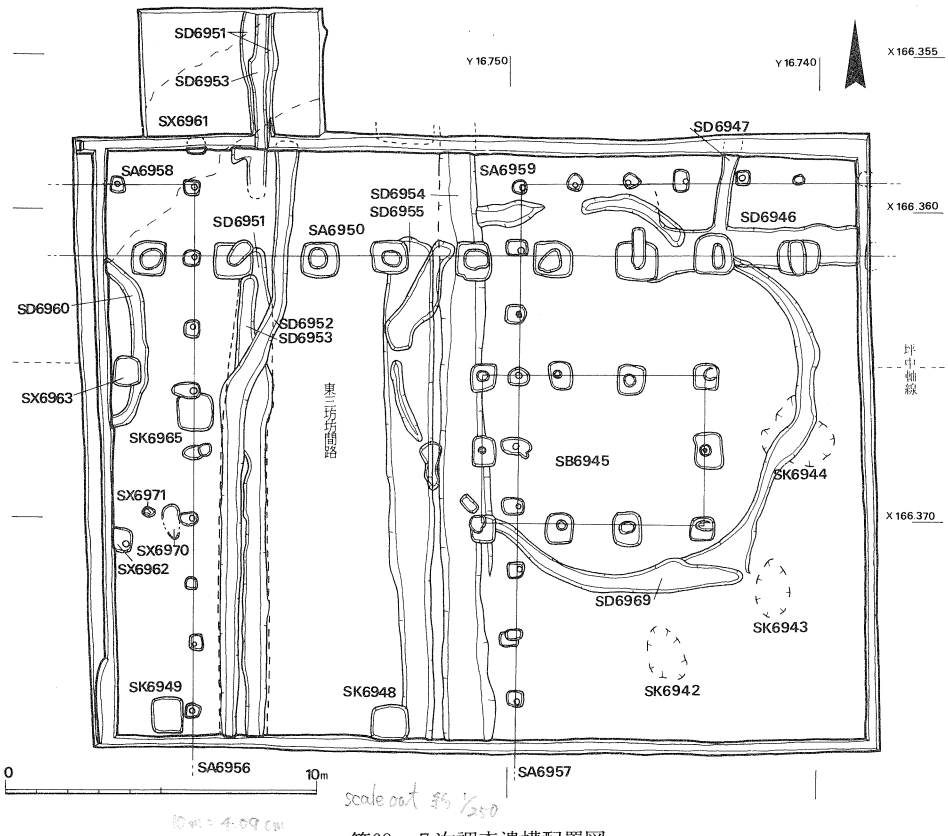
一度途切れ、北にまた続くようである。しかしSD6954は調査区内では一貫して北まで続いており、他の側溝と様子が異なっていた。SA6959とSD6951、SA6957とSD6954の心心距離がそれぞれ等しく、これらの塀と溝が組み合うようである。東三坊坊間路の路面幅は約5.6～5.8m、側溝間の心心距離は約7.0～7.1m、溝の心から塀までの距離はそれぞれ1.8～2.0mになる。SA6956は西北坪の東を限る南北塀で、東西塀SA6958が鍵の手にとりつく。またSA6957は東北坪の西を限る南北塀でやはり北端で東西塀SA6959が鍵の手にとりつく。SA6958・SA6959は同一線上に乗る。坪内をさらに南北に分ける施設であろう。各塀の柱間はSA6956が約2.1mで8間以上、SA6959が約2.0mで6間以上あり、ほとんどの柱穴には柱痕跡が残っていた。

B期 A期の坊間路および区画塀を廃して、少なくとも四条三坊西北・東北坪の両方をひとつにした宅地割へと変化した。SA6950は柱間約2.6mの掘立柱塀でA期の東三坊坊間路を遮断する形で東西に9間以上続いている。柱穴はすべて抜き取り痕跡をとまなう。しかし抜き取った方向は一定でない。SD6946はSA6950に切られる浅い帯状の東西溝である。溝の西側は削平によってはっきりとその範囲を知ることができなかった。SD6947はSD6956の北側にとりつく南北溝である。いずれも深さは10～12cm程度しか残っていない。SB6945は3×2間の東西棟で、柱間は桁行・梁行とも約2.4m等間である。西妻の柱穴は坊間路東側溝の埋土を切っており、北側の東西塀SA6950とは約3.8m隔たっている。SK6948は坊間路東側溝の埋土を切る方形の土坑である。深さ約1.1m、上層からは藤原宮期の須恵器片が出土している。SK6949は調査区の西南隅にある。SK6948とほぼ形が同じで、藤原宮期の須恵器片が少量出土した。深さは1.2m以上ある。

#### まとめ

今回の調査によって、京内のいままで調査が行われていなかった地域に展開する遺構の一部が明らかになった。藤原京関連の遺構では、東三坊坊間路とその東西の土地利用、これらを廃して新しい土地区画での大規模な営みがあったことの一部を知りえた。特にA期の1坪を田の字形に四等分する従来の土地

あ 新  
SD6953 → 6952 → 6951



第63-7次調査遺構配置図

利用から、B期の東西2坪にまたがる宅地利用へと変化していくことは新知見である。しかも、東西両坪にわたるSA6950は坪の南北2等分線近くに位置しており、1坊を横長に4等分する宅地の存在が想定できる。今後の隣接地における調査が期待される。また藤原宮期以前では、弥生時代の末頃の遺構がこの地域まで広がっていることが確認できた。

## 2 左京九条四坊の調査（第60-17次）

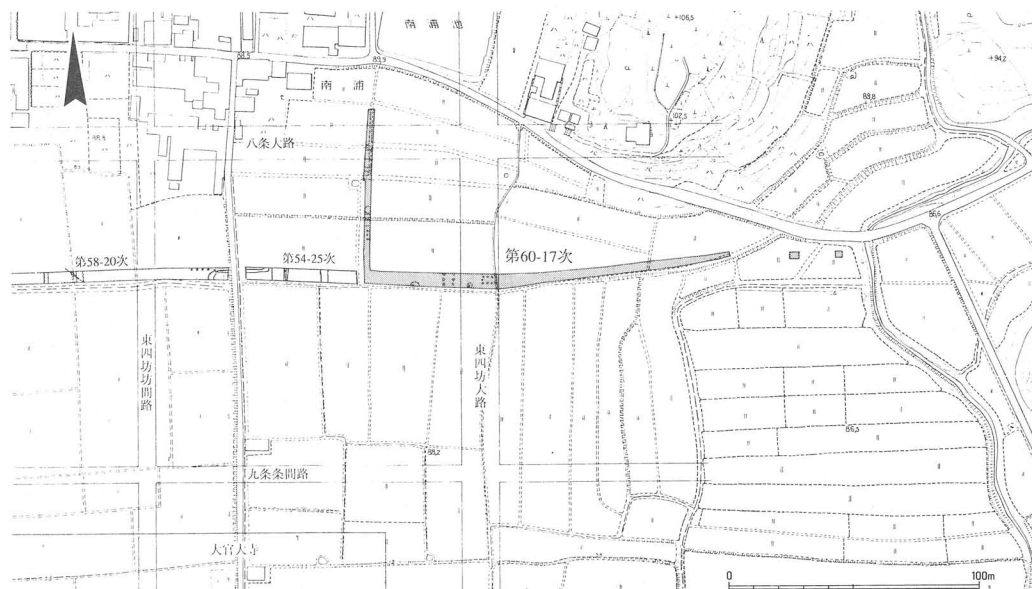
（1990年1月～3月）

この調査は橿原市戒外町から明日香村小山の村道耳成線に至る東西農道新設に伴う事前調査の最終第3年次調査である。今回は事業地の東半部約200m分と、南浦池西側からの南北支線道路約80mが対象となった。調査地は藤原京左京九条四坊東北坪で、八条大路・東四坊大路想定位置にもあたることから、藤原京の宅地遺構・道路遺構、藤原京以前の遺構状況などの把握を目的とした。

調査は東西本線部分に幅6～3mの東西調査区、南北支線道路部分に幅3～2.5mの南北調査区、また本線の東端50m部分については一段低い2枚の水田に小面積の調査区を設定した。以下各調査区の検出遺構の概要を記す。

### 東西調査区

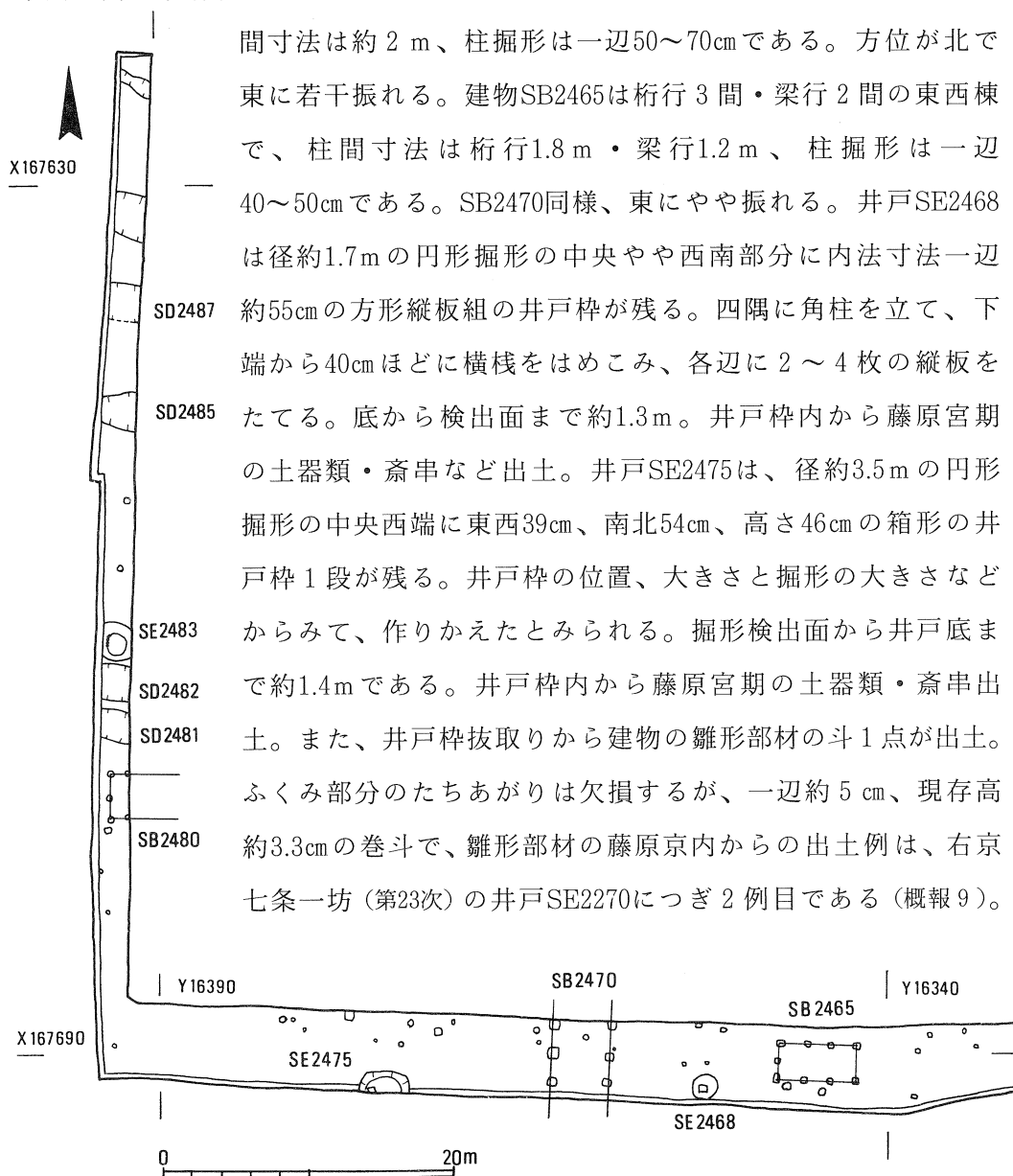
基本的な層序は、耕土・床土・灰褐色粘質土・青灰色砂質土・黄褐色粘質土・暗灰粘質土（地山）で、遺構はこれまでの調査で明らかになっている7世紀の大規模な整地土である青灰色粘質土・黄褐色粘質土上面で検出した。整地土は調査区西端で約45cmの厚さがあるが、東にいくに従いすくなくなり、約56m付近



第60-17次調査位置図（1：3000）

でなくなる。また、西端から約74m付近からは東に向かい地山面が傾斜し、古代～中世の遺物を含む厚い粘土質が堆積している。幅狭い調査区のため、粘土層の掘り下げは部分的に行ったが、東端では地表下2m以上続く。

東西調査区で検出した主な遺構は掘立柱建物2棟、井戸2基で、他に多数の東西・南北小溝、土坑などがある。建物SB2470は桁行4間以上の南北棟で、柱間寸法は約2m、柱掘形は一辺50～70cmである。方位が北で東に若干振れる。建物SB2465は桁行3間・梁行2間の東西棟で、柱間寸法は桁行1.8m・梁行1.2m、柱掘形は一辺40～50cmである。SB2470同様、東にやや振れる。井戸SE2468は径約1.7mの円形掘形の中央やや西南部分に内法寸法一辺約55cmの方形縦板組の井戸枠が残る。四隅に角柱を立て、下端から40cmほどに横棧をはめこみ、各辺に2～4枚の縦板をたてる。底から検出面まで約1.3m。井戸枠内から藤原宮期の土器類・斎串など出土。井戸SE2475は、径約3.5mの円形掘形の中央西端に東西39cm、南北54cm、高さ46cmの箱形の井戸枠1段が残る。井戸枠の位置、大きさと掘形の大きさなどからみて、作りかえたとみられる。掘形検出面から井戸底まで約1.4mである。井戸枠内から藤原宮期の土器類・斎串出土。また、井戸枠抜取りから建物の雛形部材の斗1点が出土。ふくみ部分のたちあがりは欠損するが、一辺約5cm、現存高約3.3cmの巻斗で、雛形部材の藤原京内からの出土例は、右京七条一坊(第23次)の井戸SE2270につき2例目である(概報9)。



第60-17次調査遺構配置図(1:500)

本線道路部分の東端50mは、約2mほどの段差で低くなっている。2枚の田に東西4m・南北2.5m(西側)、東西3m・南北2.5m(東側)の調査区を設けた。いずれも粘質土と砂質土の互層となった低地の堆積状況を示し、東側の調査区では砂層中からかなり多くの藤原宮期を中心とする土器類が出土した。

#### 南北調査区

層序は東西調査区と同様であるが、整地土下は北半では赤褐色砂質土となる。整地土は北端で約10cmの厚さである。主な検出遺構は掘立柱建物1棟、井戸1基、東西溝4条で、他に斜行溝、東西・南北小溝、土坑などがある。建物SB2480は西側柱2間で、東西柱列は2間以上である。南北柱間寸法は1.6m、東西柱間は1.2m。西側柱は径40~50cmの円形掘形で、礎板とみられる板材と礫が入る。東西溝4条はいずれもやや東で南に振れる。SD2482・2485からは藤原宮期、SD2481・2487からは7世紀後半の土器が出土した。井戸SE2483は径約2.7mの円形掘形で、井戸枠はすべて抜き取られていた。埋土から藤原宮期の土器類が出土した。

#### まとめ

今回の調査では藤原京八条大路・東四坊大路は検出されなかった。東四坊大路想定上には藤原宮期と考えられる井戸SE2468があり、すぐそばの建物も同時期の可能性がある。そうすると京造営当初から東四坊大路は施工されなかったことも考えられる。ただ、今回は調査区の制約もあり、今後周辺での十分な調査が必要である。

藤原宮期の宅地利用状況については、明確な建物群は検出できなかったが、井戸3基があり、周辺に建物の存在が想定される。特にSE2475からは雛形斗が出土しており注目される。包含層からではあるが鴟尾片も出土しており、位置的にみてもこの一帯が大官大寺になんらかの関連をもつことがうかがえる。

大官大寺北西一帯にひろがる7世紀前半から中頃の整地土については、ほぼ東四坊大路想定部分まで確認され、今回の調査で東西幅は約390mに及ぶことになる。昨年度の調査では整地事業に伴う石組暗渠が検出されており、今後はこの整地に伴う遺構の解明が必要である。

### 3 右京七条一坊の調査（第63次等）

#### A 第63次調査

（1990年3月～5月）

この調査は宅地造成に伴う事前調査として橿原市高殿町で実施したものである。調査は3年度にわたるもので、1989年に実施した第62次調査に引き続いた第2年次の調査である。調査地は第62次調査区の西北に接する位置で、藤原京の条坊呼称によれば、右京七条一坊西北坪にあたり、そのなかでも西北隅の一角にあたる。調査面積は約1200㎡である。

右京七条一坊の地域ではこれまでも多数の調査が行われており、坊の内部の状況が藤原京のなかでは最も明らかになっている地域である。東南の坪のほぼ全域は日高山の丘陵地であるが、西南の坪では第19・49次調査などで「コ」の字形配置をもつ一町を占地する大邸宅の中心部が明らかとなっている。東北の坪では朱雀大路・七条条間路・西一坊坊間路を検出したにとどまっている。第62次調査区は西北の坪にあたっていたが、小規模な建物群を検出している。今回の調査も、第62次調査と同様に藤原宮に接する宅地の利用状況の実体を確認することを目的として行った。

**遺構** 検出した遺構は弥生時代から中世にいたるものであるが、主たるものは藤原宮期前後のものである。

今回検出した藤原宮期前後の主な遺構は建物・溝・井戸・土坑などである。

建物は調査区の東側で3棟検出した。この3棟は東西溝SD6510と直接の切り合い関係はないが、すべてSD6510をまたぐように建てられている。

建物SB6914は西側柱筋を近代の溝で破壊されているが、2×2間の南北棟で、桁行2m・梁行1.5mの柱間である。柱掘形は0.5m前後である。

建物SB6913は3×2間の南北棟で、桁行1.5m・梁行2.3mの柱間である。柱掘形は0.6m前後である。SB6914と重複し、それより新しい。

建物SB6915は2間以上×2間の東西棟で、西半は削平されている。桁行2.5m・梁行2mの柱間である。柱掘形は0.4～0.8mと不揃いである。柱根を残す



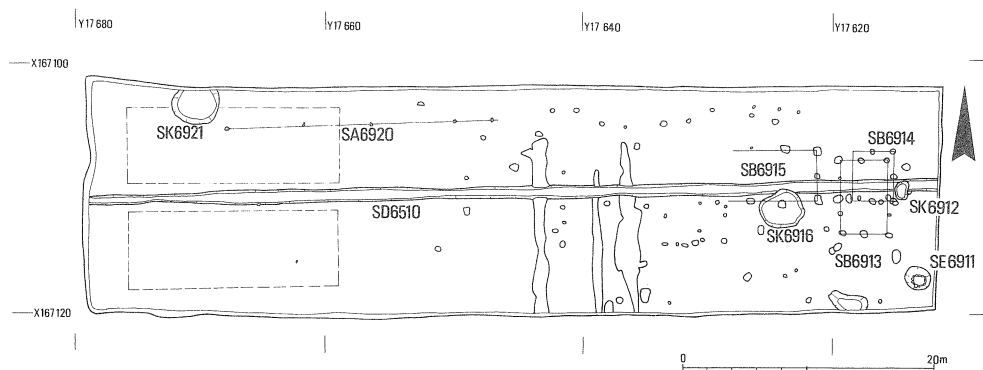
ものもある。SD6510を切る藤原宮期の土器を出土する土坑SK6916との切り合いによって、SD6510より新しいことが確認できる。

東西塀SA6920を調査区の西北部で検出しているが、他の遺構と比して振れが大きい、後出の可能性もある。削平のためか柱間は不揃いである。柱根を残すものの、柱根は0.1m程度、柱掘形は0.2m前後の小規模な塀である。SA6920は想定される六条大路の路面上、もしくは南側溝位置に存在する。

調査区のほぼ中央で検出した東西溝SD6510は幅約1m・深さ約0.3mの規模で調査区を横断し、第62次調査区から総延長120mを検出したことになる。この溝は六条大路南側溝の想定位置より約5m南に位置し、六条大路の南側溝とするには若干の疑問がある。また、SD6510の振れは西で南へ約1°という調査地周辺の条坊の振れと比較すると大きい数値を示す。埋土からは藤原宮期の土器が出土している。調査区の東南隅で検出した井戸SE6911は石組井戸で、径約2mの掘形を有し、径約0.8m・深さ約0.5mの規模であり、人頭大の石を4～5段積んで構築している。埋土から、藤原宮期の土器が出土している。

以上の遺構が藤原宮の時代および前後する時期の主な遺構であるが、第62次調査区に比して遺構密度が低いものである。

調査区の西方に弥生時代の包含層があり、その状況が北約200mの第59次調査で検出した弥生時代の水田跡と類似していたために、東西17m×南北14mの範囲で下層遺構の検出をはかったが、畔など水田であることを積極的に証明する遺構は残念ながら検出することができなかった。



第63次調査遺構配置図（1：600）

遺物 瓦・土器類が出土しているが少量である。

瓦は軒丸瓦が1点出土している。土器は土師器・須恵器のほか、蹄脚硯1点・転用硯3点、製塩土器が出土している。土製品では土馬が出土した。

石器は弥生時代の石包丁、安山岩の刃器が出土している。

まとめ 今回の調査地は第62次調査区と比しても非常に遺構密度が低いものである。第62次調査区の場合でも北半では藤原宮期の遺構の密度は低いものであったことと軌を一にするものであろうか。

遺構の細かい時期区分・並存関係は遺構どうしの切り合い関係はあるものの、出土する土器が藤原宮期のものであるため、明確なことはいいがたい。検出した3棟の建物は第62次調査の概報の区分による北で西へ約30°振れるD群に含まれるものであろう。

建物規模は第62次調査区と同様に小規模なものであり、宮に直接接する地域の一つのあり方を示すものかも知れない。宮の東西では大規模な宅地の存在が知られているが、宮に接する北側では空閑地に近い状況であり、南辺と似た状況なのであろうか。今後の調査の進展を待ちたい。

調査地内に想定される六条大路の問題であるが、六条大路は左京六条三坊(第21-2次)・右京六条二坊(第29-7次)で検出されており、その南側溝どうしを結んだ想定ラインは第62・63次調査区で検出したSD6510の北、5~6mの位置にあたるのである。しかし、両調査区ともにその位置には東西溝を検出することができなかった。このことについての一つの解釈はSD6510は六条大路と無関係な溝であり、六条大路南側溝は削平されてしまったとするものである。もう一つの解釈としては、平城宮の南辺を通る二条大路と同様に宮の前面では他の場所とは異なり道路が南に広がっており、SD6510が六条大路南側溝にあたることである。この場合、西方で南側溝を検出した第29-7次調査区は宮の南にあたっており、平城宮と同様であったとすることはできない。苦しい解釈ではあるが、藤原宮の場合では、宮の南面東門から西門までの間が他の場所と異なって広がっていたとすることができようか。いずれの場合であったとしても周辺での調査の進展を待つほかはない。

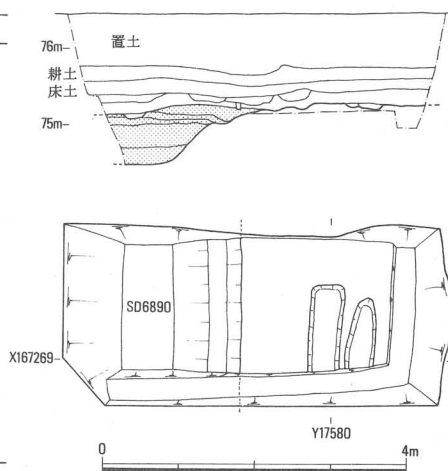
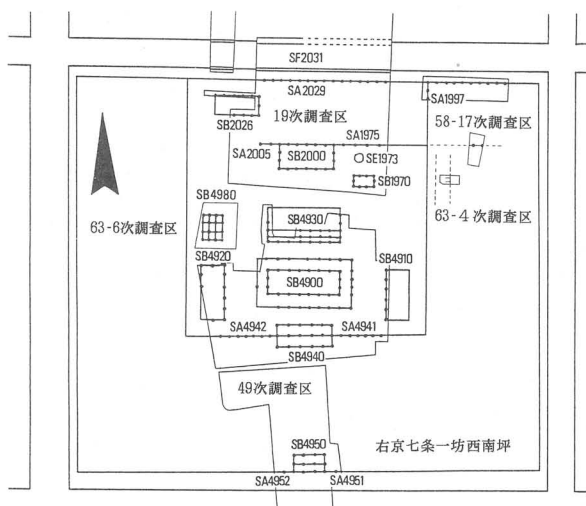
## B 第63-4次調査

(1990年5月)

この調査は榎原市営墓地の整備に伴う事前調査として、榎原市上飛驒町で行ったものである。調査地は藤原京右京七条一坊西南坪の東北部にあたる。この坪では、第19(概報7)・49(概報17)次調査の結果、坪内全体を占める大規模な邸宅遺構の存在が明らかとなっているが、邸宅内東辺部の様相は不明な点が多かった。昨年の第58-17次調査では、邸宅内を区画する東西塀SA1975が、南北塀SA1997より東まで及ぶ可能性があることが判明している。今調査地は第58-17次調査区のすぐ西南側に当たり、東西5m・南北2.5mの調査区を設定した。

調査区は現在駐車場であり、厚い盛土があり、現地表下0.7mが旧水田面である。基本層序は上から耕土・床土・青灰緑色砂質土・青灰褐色砂となる。

青灰褐色砂上面で、南北大溝SD6890と中世の南北小溝2条を検出した。SD6890は東半分のみを検出したため幅が不明であるが、検出分で2.1mあり、3m以上に復原できる。深さは80cmである。堆積土は大きく5層に分けられ、藤原宮期および若干遡る土器が出土した。SD6890の位置は邸宅内を内郭と外郭に区画する南北塀SA1997のすぐ東側であるが、当調査区の北方の第19次調査区には及んでおらず、内郭でも出ていない。掘削時期および行方については今後の調査の結果を待ちたい。



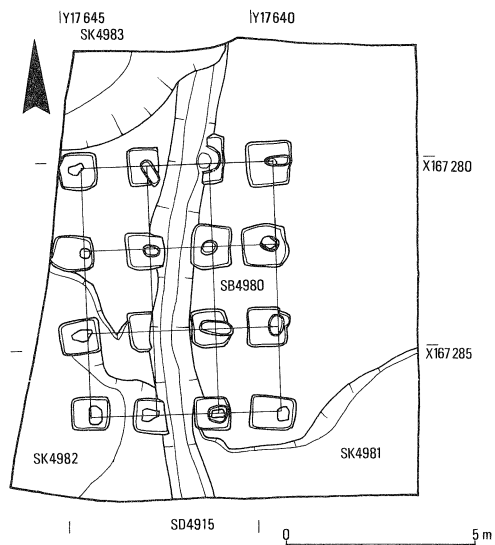
### C 第63-6次調査

(1990年7月)

この調査は市営住宅建設に先立ち榎原市飛騨町で行ったものである。調査地は藤原京右京七条一坊西南坪にあたり、第19次調査区の西南、第49次調査区の西北に接する。過去の調査では、門・脇殿を伴う正殿、後殿、後々殿等を整然と配した一町規模の宅地を検出している。今回の調査はSB4930の西側の施設を明らかにすることを目的とし、東西約9m・南北約12mの範囲を調査した。

調査区の土層は、客土・灰褐色砂質土・暗褐色砂質土ないし黄灰色砂・黒色粘土（地山）の順に堆積している。遺構は地表下約0.8mの暗褐色砂質土ないし黄灰色砂の上面で検出した。検出した遺構は、総柱の掘立柱建物1棟、土坑3基、南北溝1条、中世以降の東西及び南北方向の小溝多数である。

SB4980は南北3間・東西3間の南北棟総柱建物で、柱間寸法は南北約2.2m、東西約1.7mである。柱掘形は一辺1mの方形で、現状の深さは0.4m程である。西側柱北第2柱穴には径約30cmの柱根が、人頭大の礎盤の石上に残る。他のほとんどの柱穴にも同様な石が確認できた。柱の抜き穴は小さく、ほぼ掘形内で納まる。一部に瓦を埋めたものがある。このSB4980は南妻柱筋をSB4930の南庇とほぼそろえ西側柱筋をSB4920の西側柱筋とほぼそろえている。SD4915は幅約1m、深さ約0.7mの南北溝である。第49次調査区で検出した溝の続きで、総長約12m分を検出した。埋土から10世紀から11世紀前半の土師器・黒色土器が出土した。今回検出したSB4980は、後殿SB4930の西約12.5m、西脇殿SB4920の北約8mの位置にあり、SB4930とSB4920に柱筋をそろえている点から、後殿の脇殿風に倉庫が建てられたものと考えられることができる。



第63-6次調査遺構配置図 (1:200)

#### 4 右京九条三坊の調査（第63－3次）

（1990年4～5月）

この調査は、雇用促進事業団奈良技能開発センターの体育館建設の事前調査として、橿原市城殿町で行ったものである。建設予定地は藤原京右京九条三坊の東南坪にあたり、二坊大路の西側溝とその西側の宅地の存在が予想される位置にあたる。調査は東西33m・南北19mの範囲にL字形の調査区を設け、一部北へ拡張した。調査面積は547㎡である。

調査区の層序は、上からグラウンド造成に伴う盛土・旧水田耕土・床土・灰褐色土・灰褐色砂質土（地山）の順で、遺構の大部分は灰褐色砂質土の上面で検出した。しかし、重機の実習に伴うと思われる攪乱が著しく、遺構面はかなり破壊を受けている。

**遺構** 検出した遺構には、二坊大路の西側溝と推定される南北溝、藤原宮期の井戸・土坑・小柱穴群、弥生時代から古墳時代にかけての斜行溝と土坑などがある。このほか、調査区全体から中世以降の水田耕作に関わるとみられる東西・南北方向にのびる多数の小溝を検出したが、これについては図示・記述ともに省略する。

二坊大路の西側溝と推定される南北溝SD2641を、ほぼ想定位置で検出した。SD2641は溝の東肩が南北方向の小溝で破壊されているため、溝幅は約0.6mしか残らず、南は削平が著しく約7m分を検出したにとどまる。

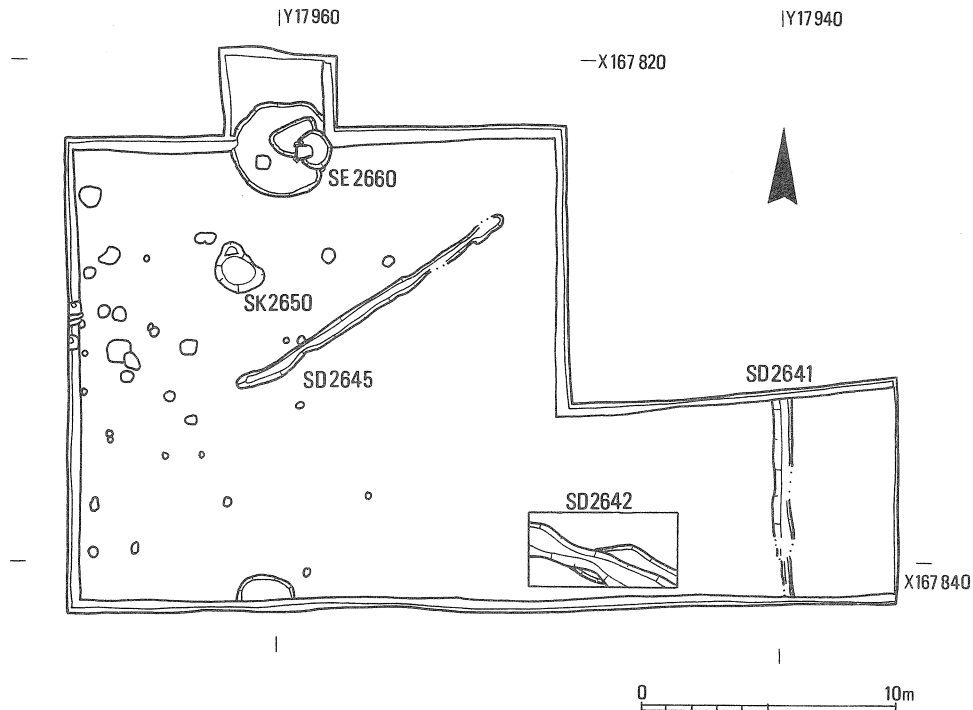
SE2660は、西側溝SD2641の西約20mの位置にある一辺約0.6mの方形縦板組の井戸である。径約3.5m、深さ約1.5mの円形掘形の東側に寄せて井戸枠を据えるが、東半は井戸埋没後に掘られた土坑SK2659によって壊されている。四隅に柱を立て、3段の横棧をほぞ留めし、内側に3枚の板を立て、その目地をふさぐように外側に2～3枚の縦板を立て、さらに補助材で外側から補強している。西側から構築されたようで、西側下段の横棧のほぞ穴は貫通していた。井戸枠内から出土した遺物には、須恵器の甕・壺・横瓶、土師器の甕などがある。また、井戸埋没後に堆積した埋土最上層からは、藤原宮期の土師器・須

恵器とともに、炭化物と銅製品の断片が出土した。

藤原宮期の遺構は、これ以外に多数の土坑と小柱穴があるが、いずれもまとまりを欠く。藤原宮期の建物は調査区のさらに西側に存在したものと推定される。

弥生時代から古墳時代にかけての遺構も顕著なものがないが、藤原宮期の遺構検出面である灰褐色砂質土の中にはかなりの弥生土器が含まれており、近くに弥生時代の集落が存在した可能性が高い。斜行溝SD2645は幅約0.5m、深さ約0.2mの素掘りの溝で約12m分を検出した。埋土から後期末の弥生土器が出土した。土坑SK2650は、長径約2m、深さ約0.5mで、摺り鉢状を呈する。埋土から後期末の弥生土器が出土した。斜行溝SD2642は、東南から西北へ流れる自然流路で、砂を主体とする堆積土から後期末の弥生土器がまとまって出土した。

遺物 出土遺物の大半は藤原宮期と弥生時代後期の土器であるが、これ以外に縄文土器、瓦器、白磁、土馬、ファイゴの羽口、埴輪片、瓦片などがごく少量出土した。



第63-3次調査遺構配置図(1:300)

## 5 本薬師寺の調査（1990－1次）

（1990年8月）

この調査は、橿原市城殿町に所在する史跡本薬師寺跡において、金堂跡基壇上に建つ庫裏の増改築に伴う事前調査として実施した。調査箇所は現庫裏北側、基壇の北辺中央付近である。調査面積は2.7㎡。遺構は遺存状態が良く、基壇周囲の雨落溝と石敷を検出した。

**遺跡の現状** 本薬師寺跡には、現在金堂跡の他に東塔と西塔の基壇及び礎石が遺存する。金堂跡は、東西約36m・南北約29m、高さ1～1.5mのやや不整な長方形土壇として残り、縁辺には低い土塁が巡るが、これは後世の工作である。基壇上には一部庫裏に隠れてはいるが、現状で19個の礎石を確認できる。うち、18個は元の位置を保つ。ただし、礎石は地面から浮き上がり、一部は根石が現れるほどなので、基壇面はかなり削平されている。礎石は身舎と庇のものであり、身舎の礎石すべてに地覆座が作り出されるから、ここに壁や扉が設けられたのであろう。柱間寸法は平城薬師寺金堂と一致する。天平尺で桁行77.5尺（中央の3間=13.5尺、脇の間=10尺）、梁間40尺（10尺等間）である。裳階の礎石は全く残っていない。また、現庫裏の基礎に凝灰岩が転用されているが、これは基壇外装材や敷石材であろう。なお、東塔には心礎のほか15個の礎石が残るが、西塔には心礎しか残っていない。

### 過去の調査

本薬師寺に関連する発掘調査は過去に3回実施された。1976年の第1次調査では寺域西南隅を調査し、藤原京の八条大路と西三坊大路の交点、寺域の西を限る区画施設に関連するとみられる南北溝を検出した（概報6）。1983年の第2次調査は、金堂跡の東北東、寺域の東辺ほぼ中央で行われ、7世紀の自然流路を検出、これが本薬師寺造営の7世紀末には埋立て整地されたことを確認した（概報14）。第3次調査は1989年に実施されたもので、金堂跡の西方、回廊の内側で調査した。しかし、境内面が深く削平されていることを確認するにとどまった（概報20）。

## 遺 構

今回の調査は、現在の庫裏の北側、金堂跡土壇の北辺ほぼ中央に、南北1.9m・東西1.4m、面積2.7㎡の調査区を設けて実施した。調査区の層序は、上から表土・暗黄褐色土・灰色混じり茶褐色土で、各層とも北に傾斜して堆積する。暗黄褐色土の下部以下には大量の瓦が含まれていた。灰色混じり茶褐色土の下、地表下約1.5mで、玉石敷と東西方向の玉石組雨落溝を検出した。玉石組の雨落溝は人頭大の石を両側に立て並べ、底にも同様の石を敷く。内法で幅50cm、側石頂部から底石の上面までの深さは約10cm、石敷と溝の底石の比高差は約5cmである。溝の中には瓦を含む砂層が薄く堆積していた。石敷はこの溝の北と南に広がるものであり、やはり人頭大の石を敷き並べ、隙間に小さな石をはめ込む。溝の北で石の抜けている所があるものの、調査区内での遺存状態はよい。溝は調査区の東西に延びる。石敷も調査区の外へさらに広がるが、南は溝の南肩から1石分、約30cmの石敷を確認したのみで、その南は石がなかった。これが石敷を抜いたためなのか、階段の石を抜いたためなのかは明かでない。なお、金堂礎石の上面と石敷面との比高差は1.6mある。石敷と石組溝の下層は調査しなかった。

## 遺 物

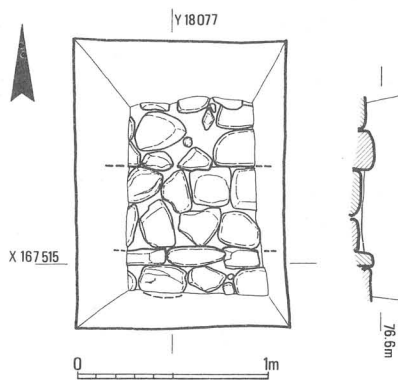
出土遺物は、瓦と土器、および少量の凝灰岩片である。瓦は多量の丸・平瓦のほかに、軒瓦13点、熨斗瓦3点、鬼瓦1点がある。軒瓦は、軒丸瓦5点と軒平瓦8点。これを型式別にみると、軒丸瓦は創建の6276型式E種2点、奈良時代中頃の平城宮6225型式B種2点、奈良時代末頃の復古瓦（薬師寺33型式）1点である。軒平瓦は、重弧紋2点（うち三重弧紋1点）、6641型式2点（H種1点、K種1点）、6647型式I種3点のほか、奈良時代後半（平城薬師寺C期〔天平宝字2（758）～延暦3（784）年〕の6763型式B種1点がある。6647IはC種に似るが内区厚が狭い小型の軒平瓦。2次調査でも1点出土している。6276Eと組み合せて、金堂裳階に葺かれたのだろう。以上の軒瓦のうち、軒丸瓦6225Bと軒平瓦6647I以外すべて、平城薬師寺からの出土が確認されている。

土器は土師器・須恵器・瓦器があり、近世の土師器皿が多い。

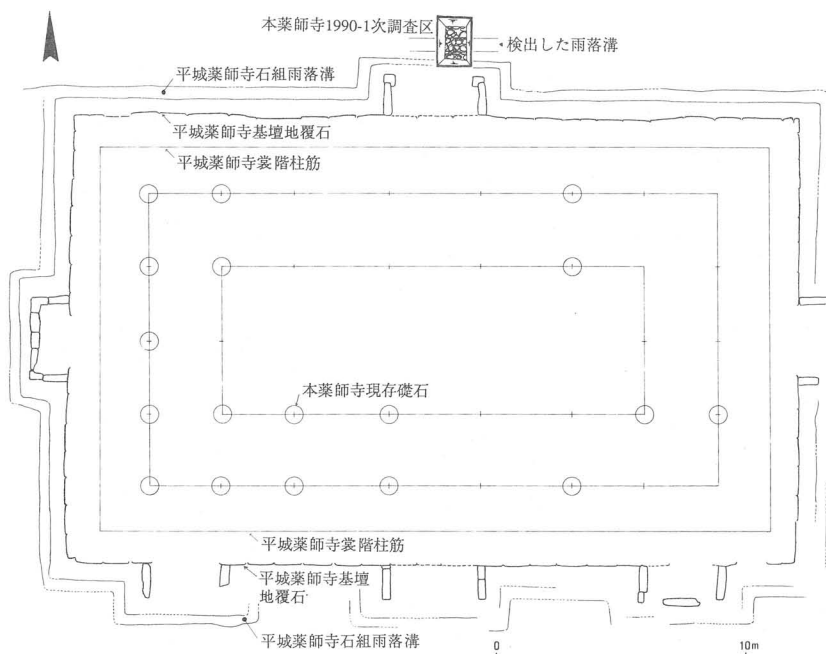


まとめ

今回の調査区は小規模なものではあったが、本薬師寺金堂についていくつかの重要な手がかりを得た。まず、今回の調査位置であるが、本薬師寺金堂跡に残る礎石の配置は平城薬師寺のそれと一致するので、現地に残る礎石位置を測量し、それと平城薬師寺の金堂発掘遺構図とによって二つの金堂を比較すると、今回の調査区は金堂北辺の中央やや東より、金堂背面の階段外にあたる。従って、検出した雨落溝は階段の北を巡る雨落溝、石敷は基壇周囲の石敷に対応する。雨落溝を石組とし、玉石敷を伴うことは平城薬師寺と同じである。しかし、平城薬師寺の同じ位置の雨落溝に比較すると、今回検出した溝は北肩で約1m北、つまり外側にある。さらに、平城薬師寺では、雨落溝が基壇周囲では幅約50cmあるのに対し階段位置では幅約30cmと狭くなるが、今回検出したものは約50cmと広い。



本薬師寺1990-1次調査遺構平面図・断面図



本薬師寺1990-1次調査位置図

このように、今回の調査によって、本薬師寺金堂は平城薬師寺と同じく基壇周囲に石敷と石組の雨落溝が巡っていることが明らかとなった。しかしながら、その雨落溝の位置は平城薬師寺のそれよりさらに外側に位置して今後検討課題を残すこととなった。本薬師寺金堂跡には裳階の礎石が全く残っていないが、出土軒瓦に裳階の軒瓦と推定される小型のものが含まれるので裳階があったことは間違いない。今回の調査位置が背面の階段位置であったことを勘案して二つの薬師寺金堂の雨落溝の位置の違いを解釈すると、

- ①基壇や階段の規模は平城薬師寺と同じ。階段の雨落溝の位置だけが違う、
  - ②基壇平面規模は同じだが階段の規模が大きいため雨落溝が外側に位置する、
  - ③基壇も階段も規模は同じだが雨落溝が全体に一回り外に位置する、
  - ④基壇規模が平城薬師寺より大きい、
- などの可能性が考えられる。③の場合には裳階の軒の出を大きく想定する必要があり、裳階の礎石位置が同じでは構造的に無理が生じ、④のように基壇規模を大きくみて、裳階の礎石も一回り外側に配置されていたと考えた方がより可能性がある。これらの可能性を検証するためには今回の調査はあまりに小面積である。

出土遺物についての新たな知見は、これまで知られていなかった裳階の軒瓦の組み合わせ(6276E-6647I)が考えられたこと、奈良時代の軒瓦が出土したことである。後者は奈良時代にも修理などが行われたことを推測させるが、奈良時代の軒瓦が平城薬師寺と同範かあるいは平城宮と同範の軒瓦であったことは、本薬師寺が依然官寺として維持管理されたことを推定させる。

先にも述べたように本薬師寺金堂跡は遺構の遺存状態がかなり良好であり、今後の調査・整備が期待される。

## 6 その他の調査

### A 右京二条二坊の調査(第60-19次)

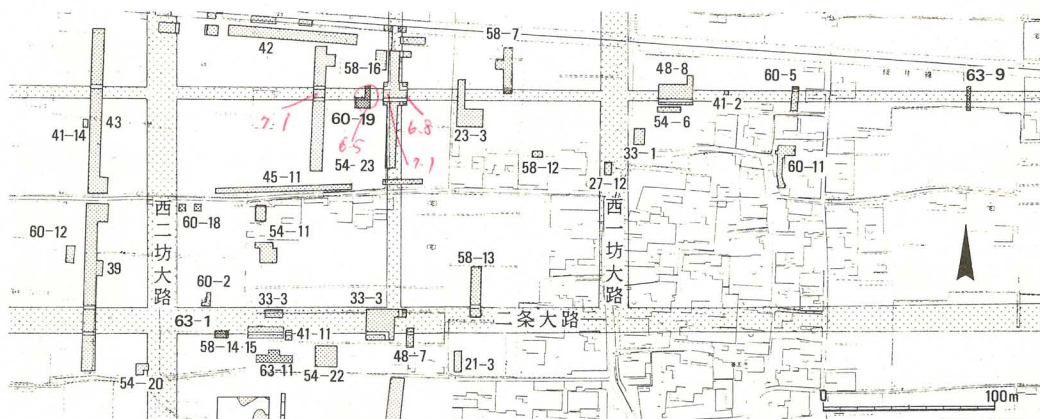
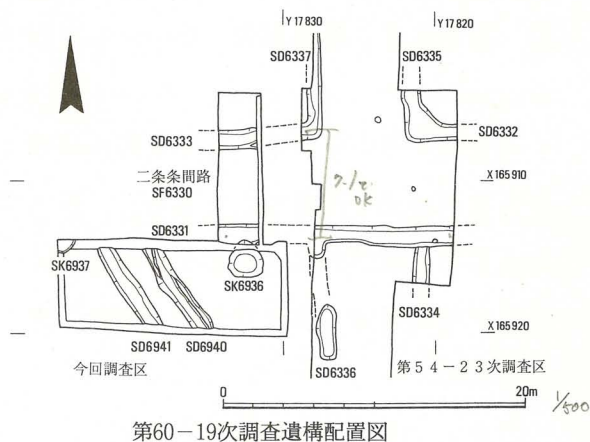
(1990年3月~4月)

この調査は住宅新築に伴う事前調査として、檀原市醍醐町で行ったものである。調査地は、藤原京右京二条二坊西南坪から二条条間路にまたがっている。周辺は前年度までの調査で、西二坊坊間路と二条条間路の交差点、右京二条二坊西北坪内にいとなまれた施設等が明らかになっている。

調査は、坪内に予想される施設と条間路の一端を知るため、15×5mの東西トレンチと、北につながる3×10mの南北トレンチを設定して行った。

調査区の基本層序は耕土・床土・暗褐色粘質土・黄褐色粘質土・暗茶褐色粘質土で、暗褐色粘質土・黄褐色粘質土の各上面には多数の南北・東西小溝と、黒色土器片を含むSK6936がある。その下層の暗茶褐色粘質土で二条条間路南北側溝SD6331・SD6333と斜行溝SD6940・SD6941を検出した。二条条間路の南北側溝は、ともに幅約1.2m、条間路の路面幅は約5.1mである。斜行溝は双方とも幅約0.6mで東南から西北に向かってトレンチのほぼ中央に並んでいた。二つの斜行溝は灰白色粗砂によって一気に埋もれた状況で、出土遺物もなく、その性格はわからなかった。藤原宮期以前の可能性が強い。

遺物は、床土下より中世の瓦器



右京二条一・二坊周辺調査位置図

片に混じって、藤原宮期の土師器片・須恵器片、少量の瓦と軒平瓦・軒丸瓦の小片が1点ずつあった。条間路の両側溝内からも少量の土師器片・須恵器片が見つかっている。

#### B 右京二条二坊の調査（第60-18次）

（1990年2月）

この調査は住宅新築に伴う事前調査として、橿原市縄手町で行ったものである。南北2m幅で敷地いっばいにトレンチを設定し重機で掘削したが、盛土が厚く、床土下の暗灰褐色粘土層を2.5mの深さまで掘ったが遺構・遺物は確認できなかった。

#### C 右京二条二坊の調査（第63-1次）

（1990年4月）

調査地は藤原京右京二条二坊西南坪南方で、二条大路の想定位置にあたる。また宮西外濠の延長線上である。二条大路南側溝の想定線と西外濠延長線にかかる形で、東西10m・南北6mの調査区を設定した。検出した遺構は、中世の小溝多数と縄文土器を含む南北流路1条のみで、藤原宮期の遺構は確認できなかった。

#### D 右京二条一坊の調査（第63-9次）

（1990年11月）

この調査は、住宅新築の事前調査として橿原市醍醐町で行った。東西5m・南北15mの調査区を設けたが、盛土が厚く遺構面では3×13mほどを調査した。

調査によって、二条条間路南側溝SD6412を検出した。幅0.7m、深さ0.2mである。北側溝SD6411は削平されて遺存していなかったが、その北で東西に並ぶ2個の柱穴を検出した。SD6411の想定位置から北へ約1mを隔てる。西北坪の南限を画す掘立柱東西堀の柱穴かもしれない。柱間は2.7～3mと推定される。